

寛永度大山寺本堂の平面・意匠と明治度の再建過程

小沢 朝江^{*1} 猪狩 渉^{*2}

The Plan and Design for the Main Hall of Ohyamadera Temple during the Kan-ei Period and the Rebuilding Process during the Meiji Period

by

Asae OZAWA^{*1} and Ayumi IGARI^{*2}

(Received on Sep. 28, 2015 and accepted on Nov. 12, 2015)

Abstract

The main hall of Ohyamadera temple was built in 1641 by the Shogunate and burnt down in 1854. It was rebuilt in 1885 and still stands today. The aim of this study is to present the original plan and elevation of the building as it was in 1641, and to declare the change and succession before and after the separation of Buddhism and Shintoism by comparing the two of them.

The main hall in 1641, measuring 22.5meters wide by 14.1meters long, was a large Buddhist building. It has many of the same features of other temples built in the same period by the Shogunate such as Tosyunuri, the space like Haiden of shrine in the hall, and the Daibutsu style for the bracket complex. During the rebuilding process that took place in the Meiji period, the design reflected the tastes of the time such as addition of Nokikarahafu in Kouhai and the adoption Shiraki-dukuri. On the other hand, it was intended that the ideas of Kan-ei period, such as the Plan, scale, and the Daibutsu style, be adopted. In particular, Sansha kenku no basho was adopted in spite of the fact that Buddhism and Shintoism had already been separated.

Keywords: Ohyamadera temple, Main hall, Rebuilding process, Tenaka Kagemoto, Separation of Buddhism and Shintoism

1. まえがき

大山寺(神奈川県伊勢原市)は、天平勝宝7年(755)に僧良弁が開いたとされる真言宗の道場であり、近世の大山詣の隆盛で知られる。この近世の造営については山岸吉弘氏の論考があり¹⁾、慶長13年(1608)と寛永18年(1641)に徳川幕府が伽藍を再建し、後者(以下「寛永度」と呼称)は幕府の工匠が担当したことが明らかにされている。この寛永度の本堂は、「大堂」とも呼ばれる大規模な仏堂だったが、後述のように安政元年(1854)に大火により焼失、再建途中の神仏分離令による寺地移転を経て、明治18年(1885)に現存本堂が完成した(以下「明治度」と呼称)。

筆者は、2014年度「文部科学省 地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)の助成研究「伊勢原市大山町・秦野市蓑毛における大山信仰の文化的景観に関する調査研究」の一環として、大山信仰の拠点であった大山寺の史料調査と復原考察に取り組んだ。本稿では、その成果として、失われた寛永度大山寺本堂について、手中家所蔵の大工文書^{*1}により復原案を提示すると共に、明治度の再建過程や平面・意匠と比較することにより、大山寺本堂の神仏分離前後での変化と継承を明らかにする。

*1 工学部建築学科教授

*2 工学研究科建築学専攻修士課程

2. 大山寺本堂の造営経緯

2.1 大山寺本堂の寛永度造営

大山寺の寛永度造営は、寛永15年(1638)4月7日に寺社奉行に発せられた再興の命に始まる。翌16年12月に徳川家光が伽藍再建を命じて金一万両を下賜、同17年8月14日に新初を行い、同18年11月8日に落成した²⁾。大山には、室町時代から大山寺の造営を手掛け、代々明王太郎を襲名した大工・手中家³⁾があったが、棟札写し^{*2}によると、本堂(大堂・不動堂)^{*3}を担当したのは木原木工允義久・平内大隅守正信など幕府の工匠で、手中明王太郎景吉は山頂の本宮(明王権現宮・石尊宮)のみ棟梁を務めた¹⁾。

その後、貞享3年(1686)には大山寺別当が寺社奉行に堂社の修理を要望、元禄6年(1693)5月から開始され、このうち本堂の修理は棟札写しによると同年11月1日に完了した。この折も、本堂など主要堂は幕府方の河合利右

*1 手中道子氏蔵、神奈川県立公文書館寄託。資料は『相模国大山大工棟梁手中家資料所在目録稿』として整理。以下、文書の数字は同文書群の史料番号を示す。

*2 「大山寺諸堂棟札之写」(手中家文書14)。

*3 大山寺の本堂は、寛永度・明治度とも「不動堂」「大堂」とも呼ぶが、本文では引用を除き「本堂」に統一する。

衛門・橋本七左衛門らが担当し、手中明王太郎吉當は山頂の本宮を分担している¹⁾。

しかし、安政2年(1855)正月2日に大山中腹の坂本町から出火、強風により最も下方に位置した前不動堂から順次燃え広がり、本堂・楼門・仁王門・本地堂・一切経堂・鐘楼堂など伽藍の大部分を焼失した⁴⁾。

2.2 大山寺本堂の明治度造営

安政2年(1855)の大火から再建までの経緯については、大工・手中明王太郎景元の日記⁵⁾から知られる。

まず火災後、救出された本尊は、前不動堂跡地に仮殿を建設して安置⁶⁾、さらに同じ場所に仮大堂を計画し、手中景元が担当して同年4月2日に新始⁷⁾、同年5月28日に竣工した⁸⁾。

本普請の準備が始まったのは安政4年で、同年10月に焼失した堂社の規模・仕様の書上げや地割図(配置図)を作成、翌年これを寺社奉行に提出して再建を願い、普請金として白銀50枚が下賜された⁹⁾。万延元年(1860)から用材の準備にも開始したが、幕末の動乱により工事に着手できないまま明治を迎えた。

明治元年(1868)9月、大山寺は明王寺と改称¹⁰⁾、神仏分離令の発令により、明治2年5月には仮大堂を含む全堂社を翌年2月までに取り壊して下方の来迎院に移転するよう命じられ、実行した。この際、寺地は来迎院とその上方の八幡平一体に定められ、元の寺地は阿夫利神社下社、山頂の本宮は同社上社に改められた¹¹⁾。

再び本堂の再建に着手したのは明治10年で、同年7月7日に板戸村(現・伊勢原市板戸)の玉川弥右衛門が手中景元に「不動尊大堂ヲ始メ普請取掛」を告げ、「板絵図面」の制作を依頼した¹²⁾。この「板絵図面」は再建費用の勧進用とみられ、同年9月に仮堂に掲げられた。明治11年3月2日には、敷地として来迎院上方の八幡平を開削することを決定、翌12年9月から用材の手配も開始した¹³⁾。平面や規模は、後述のように複数度変更されたが、同年10月30日にようやく決定¹⁴⁾、明治16年3月27日の「新地祭」、同月28日の「新始祭」により工事が始められた¹⁵⁾。傾斜地のため工事は難行したが、明治17年

10月18日に「柱立始メ」、同年11月28日に上棟¹⁶⁾と進み、18年11月27日に竣工して入仏式が行われた¹⁷⁾。

この再建の棟梁は、着手時に玉川弥右衛門らから手中景元に依頼され、図面や仕様書の作成、用材の手配を担っていたが、明治15年5月7日に大山寺の子院のひとつ喜楽坊が、棟梁として半原村(現・愛甲郡半原)の矢内右兵衛高光を推した¹⁸⁾。半原村は、江戸後期から大工の集住地として知られ⁴⁾、特に矢内高光は幕末の江戸城造営にも参加した中心的な大工であって⁵⁾、手中景元が率いる大山大工と対立した。しかし、新始に先立つ明治16年3月17日に、本堂再建の運営組織として周辺村の有力者が「大山大堂再建協会」を結成¹⁹⁾、同年4月1日に協会が手中景元に正棟梁、半原大工・矢内右兵衛に副棟梁を委任して決着した²⁰⁾。

3. 寛永度本堂の平面・意匠

3.1 寛永度本堂の史料

寛永度本堂は、先述の通り幕府の工匠が担当したが、その史料が手中家に伝えられている。

まず図面では、寛永18年(1641)11月の年紀を持つ「大山寺大堂建地割及び指図」(手中家文書16。以下「建地割」と略記。Fig.1)があり、縮尺10分の1の妻方向の断面図の上に、メクリで西面の立面図を描き、かつ図面の右上に縮尺50分の1の略平面を描く(Fig.2)。

一方「大山寺境内伽藍配置図」(手中家文書3269。以下「伽藍図」と略記。Fig.3)は、年紀は無いが明治2年(1869)の移転以前の寺地に合致すること、元禄6年(1693)に新造され、かつ安政2年(1855)の焼失一覧にあ

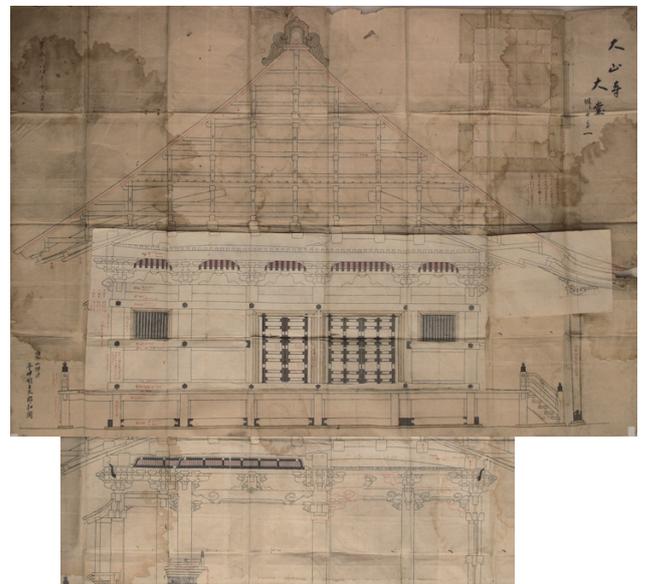


Fig.1 「大山寺大堂建地割及び指図」
(手中家文書16.上図はメクリ上,下図はメクリ下)

*4 安政元年12月「萬出火控」(手中家文書583)。

*5 手中家文書のうち、手中景元の日記類は手中正『明王太郎日記』として私家版で翻刻・刊行されている。

*6 安政2年正月「大火萬控」(手中家文書591)。

*7 安政2年「大堂并諸社堂上屋鋪御普請手控」(手中家文書590)。

*8 大山寺仮大堂棟札(手中道子氏蔵)「安政二乙卯年五月廿八日 奉再建阿遮羅明王假殿一字」。

*9 安政4年6月「大山寺御用留」(手中家文書620)。

*10 大正4年(1915)に大山寺の旧号に戻した。

*11 明治元年12月「日用留記」(手中家文書794)。

*12 明治10年7月「前社本殿・不動尊大堂・腰掛神社興手控」(手中家文書1027)。

*13 明治11年1月「宝珠山不動尊伽藍再建諸手控」(手中家文書1039)。

*14 明治12年「阿夫利神社御本殿用材寸法仕上明細控」(手中家文書1068)。

*15 明治16年正月「日記」(手中家文書1258)。

*16 明治17年6月「宝珠山控」(手中家文書1368)。

*17 「讀賣新聞」明治18年11月7日広告「大山不動尊入佛式」。

*18 「日記(外題無し)」(手中家文書2968)。

*19 注15に同じ。

*20 明治16年4月「大堂再建棟梁委任状」(手中家文書1275)。

る一切経堂が描かれていないこと、手中景元が書いた安政7年の『萬手控』にはほぼ同じ配置図が収録され、「寛永八控」と注記することから、元禄修理以前の伽藍配置を示すと判断できる。本堂は、柱と間仕切り線のみの略平面で描かれ、柱間寸法等の記載がある (Fig.4)。

一方文書では、「大堂加所書」(手中家文書 3190。以下「加所書」と略記)と題する史料が存在し、その名の通り、土台・柱・長押・建具など部位ごとに寸法・材種・仕上げ等を詳細に記す。この「加所書」は、大堂以外に楼門・仁王門・阿弥陀堂・護摩堂・本地堂など12ヶ所分10冊(手中家文書 3179~3189。うち3185は「箇所書」と記す)が現存し、いずれも年紀を欠くが、手中景元の「大山寺御用留」(手中家文書 620)によると、安政4年10月29日に伽藍再建願いのため焼失した建物の図面と「加所書十九ヶ之分都合十五冊」を作成しており、冊数は不足するものの、これが「加所書」に当たるとみられる。したがって「加所書」は大火後の安政4年の作成だが、焼失直後の詳細な記載として信頼性は高いといえる。

さらに、元禄6年の修理に際して作成された「大山堂社御修復仕様帳」(手中家文書 102~105, うち103は本堂。以下「元禄仕様帳」と略記)にも本堂の仕様が記される。

手中家文書以外では、天保10年(1839)刊行の地誌『相州留恩記略』⁶⁾(挿図は長谷川雪堤筆)に安政焼失以前の伽藍が描かれ、本堂南面の立面をみる事ができる (Fig.5)。

3.2 寛永度本堂の平面

以上の史料から復原した寛永度本堂の平面を Fig.6 に示す。

寛永度本堂は、柱間は桁行7間・梁間5間で、正面に幅3間の向拝を付す。各柱間は枝割すなわち垂木間隔の倍数で設計され、「建地割」「伽藍図」記載の寸法と明治14年(1881)の覚書^{*21}によると、実長は桁行12間2尺1寸8分×梁間7間4尺6寸4分(74.18尺×46.64尺、約22.5m×14.1m)で、さらに巾6.96尺(約2.1m)の擬宝珠高欄付きの縁を廻らした。柱は

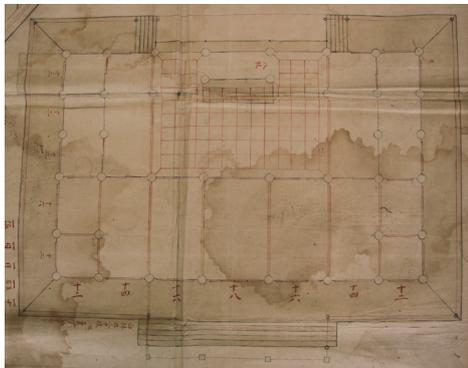


Fig.2 「大山寺大堂建地割及び指図」
平面図部分

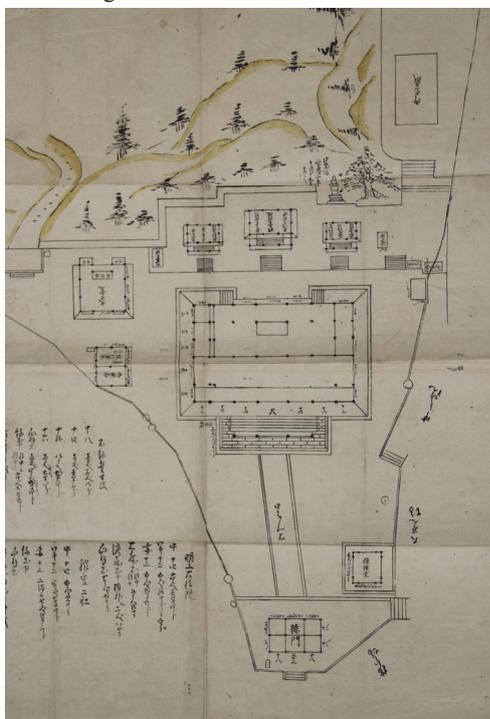


Fig.3 「大山寺境内伽藍配置図」
(手中家文書 3269)

内陣廻りが径1尺8寸、側廻りが径1尺6寸だった^{*22}。

「加所書」にみる部屋名は Fig.6 の通りで、平面は内陣・外陣から成る密教本堂の典型的な形式である。内陣西側に「護摩所」「堂番居所」、東側に「御供所」を置き、建具は側廻りには棧唐戸と連子窓、内陣・外陣境には中央5間に「枅格子戸」(引戸)、護摩所・御供所前面に嵌め殺しの「枅格子」を建てた。

最も注目されるのは、「本尊裏」すなわち須弥壇背後を「三社献供之場所」と呼ぶ点である。「伽藍図」所載の平面によると、この場所は背面側に張り出して3間分の棚が描かれ、かつ「加所書」によると「加藤形之マト三ヶ所」を備えていた。「伽藍図」(Fig.3)によると、本堂の背後には境内社三社が建ち、大山の祭神明王権現、大山と関係が深い富士浅間宮など九座を祀る。「三社献供之場所」とは、これら祭神を室内から参拝する場とみられ、室内に神社拝殿的な空間を内包したといえる。

3.3 寛永度本堂の意匠

次に外観は、「建地割」および『相中留恩記略』の挿図によれば、屋根は一重・入母屋造、屋根材は「元禄仕様帳」によれば桐葺である。高さは、側柱長さが19.12尺(約5.8m)、軒高が24.27尺(約7.4m)で、縁床高も4.8尺(約1.5m)と高かった。向拝は葺き下しで、組物は出三斗、木鼻は獅子、中備は龍の彫物の臺股とし、木鼻・臺股および菖蒲桁は金箔張りだった。用材は、「加所書」によると、土台・柱・虹梁など主要軸部は楓、長押・化粧垂木・建具等は檜、小屋組は松を主に用いた。

一方内部は、「加所書」によれば、内陣上部に2本、外陣

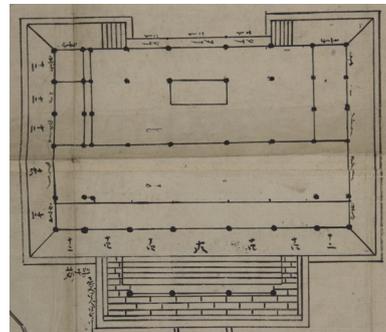


Fig.4 「大山寺境内伽藍配置図」
平面図部分



Fig.5 『相州留恩記略』「大山寺」
(福原高峰:相中留恩記略、
有隣堂,1967より転載)

*21 明治14年「宝珠山普請諸控」(手中家文書 1142)。

*22 寛永度の寺地は、先述の通り現在阿夫利神社下社になっているが、寛永度本堂の礎石11個が現存し、側廻りとみられる径1尺8寸の柱の当たりが確認できる。

上部に6本の繫虹梁を架け、内陣・外陣境の長押上には「三十六童子」の「(再繪)絵像、高模繪」、本尊廻りには「雲上天人之彫、塗之儀者極彩色」の欄間を置いた。内陣柱は金箔張り、来迎柱はその上に「(再繪)五色高模繪」を施すが、他の部材の多くは「土朱塗」と記される。土朱塗は、同時期に幕府が造営した日光東照宮(寛永 13・1636)、延暦寺根本中堂(寛永 19・1642)等の仕様書にも確認できる仕上げで、赤土ベンガラを用いた赤色の塗装である^{7,8)}。朱漆等による塗装と使い分けられたとされ、大山寺本堂の場合、軸部・組物、桧格子の板面には土朱塗を用いる一方、棧唐戸の板面や長押上欄間の棧には本朱塗(漆塗)を用いた。

組物は、側廻りは出組、中備は臺股で十二支の極彩色の彫物を付したことが「加所書」から判明する。ただし内陣廻りは、「内陣栴組(中略)、細工者天竺様ニ組堅メ」とあって「天竺様」すなわち大仏様の採用が示唆され、「建地割」でも挿肘木の使用が確認できる。

以上を反映して復原した南側立面図は Fig.7 の通りで

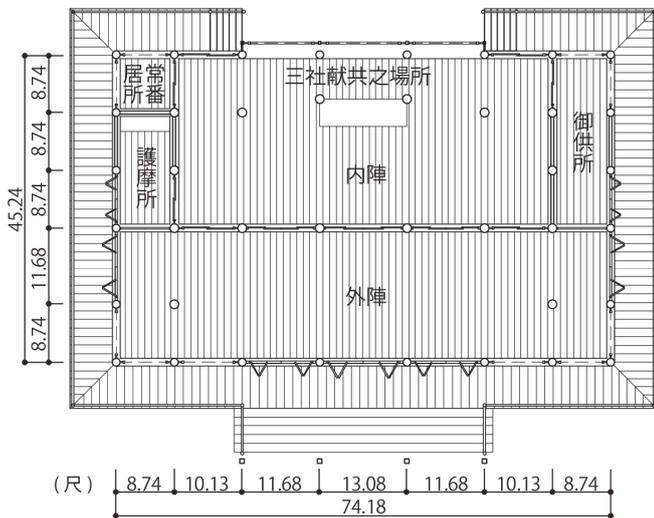


Fig.6 寛永度大山寺本堂 復原平面図
(縮尺 1/350. 復原考証・小沢朝江, 作図・猪狩涉)

ある。塗りなどの仕様や彫物の題材は、先述の延暦寺根本中堂(寛永 19・1642)とよく共通し、江戸前期の幕府普請の特徴を反映するといえる。

4. 明治度本堂の設計過程と平面・意匠

4.1 明治度本堂の設計案

この寛永度本堂の平面・意匠は、続く明治度にどのように継承されたのだろうか。

先述の通り、明治度本堂は、明治 10 年(1877) 7月に再建準備に着手、明治 18 年 11 月に遷仏したが、手中家文書にはこの間の図面・仕様書として 13 案が確認できる。

まず図面は 8 点あり (Table 1), 明治 11 年 4 月の 2 図 (手中家文書 1059-1, 1061) は共に境内全体を描く配置図で、1061 は下図, 1059-1 は清書とみられる^{*23}。中心となる寺地に「此山字ハ八幡平之岩山也」と注記することから、同年 3 月に掘削を始めた八幡平の新寺地での計画図であることは明らかだが、敷地形状や境内建物の規模・配置は安政の焼失前の伽藍をほぼ模している。各建物は、平面の表現は無く、梁間・桁行の規模のみ記載する。

明治 12 年 10 月案 (手中家文書 1082) は、本堂の正面外観を描く手書き図と木版図の 2 枚から成る。手中景元

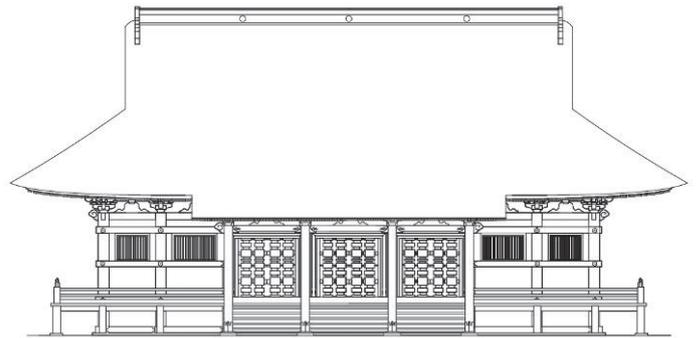


Fig.7 寛永度大山寺本堂 復原立面図
(縮尺 1/350. 復原考証・小沢朝江, 作図・猪狩涉)

Table 1 明治度大山寺本堂の史料と平面・意匠 (No.の Z は図面,S は仕様.-は記載無し)

No.	年月日	史料番号	史料名	桁行	梁間	主屋根	向拝	側廻り	向拝	内陣廻り	背面
	寛永18.11.8		寛永度本堂	12間2尺1寸8分	7間4尺6寸4分	一重入母屋	葺下し	出組		天竺様	火燈窓
Z1	明治11.4	1059-1	大山再建地割	12間	10間	—	—	—	—	—	—
Z2	明治11.4	1061	十一ノ年不動尊再建地割	12間	10間	—	—	—	—	—	—
Z3-1	明治12.10	1082	大山再築建地割(手書き)	—	—	二重入母屋	葺下し→軒唐破風	三手先	出三ツ斗	—	—
Z3-2	明治12.10	1082	大山再築建地割(木版)	—	—	二重入母屋	軒唐破風	三手先	出三ツ斗	—	—
Z4	明治14.3.16	1059-2	大山再建地割	9間4尺4寸8分	8間1尺4寸8分	—	—	—	—	—	—
Z5	明治14.6.1	1144	大山本堂地割 百分一	9間4尺4寸8分	8間1尺4寸8分	—	軒唐破風	—	—	—	カトウ
S1	明治15.4.19	1210	大堂再築二附諸決議簿	9間4尺4寸8分	8間1尺4寸8分	—	—	—	—	—	—
Z6	明治15.6.11	2968	(外題・内題無し)	8間2尺5寸4分	7間1尺3寸3分	入母屋	—	二手先	重三ツ斗	—	(窓)
	明治15.10.30		木割決定								
S2	明治15.12	1254	仕様積書	8間5尺3寸6分	7間4尺1寸	—	古留唐博風造	貳手先	重三ツ斗	雨笠様	火燈窓
S3	明治16.1	1255	大山宝珠山不動尊大堂仕様書	8間	7間	入母屋	古留唐博風造	貳手先	重三ツ斗	雨笠様	火燈窓
	明治16.3.28		新始								
Z7	明治16.4	1282	宝珠山本堂平面図	8間5尺3寸6分	7間4尺1寸	入母屋	古留唐博風造	—	—	—	火燈口
S4	明治17.5.10	1358	宝珠山大堂大工方仕様積帳	—	—	入母屋	(記載無し)	外: 二手先/内: 出組	(記載無し)	出組・台斗無し	—
S5	明治17.5.21	1362	宝珠山大堂大工仕様帳手控	—	—	入母屋	(記載無し)	外: 二手先/内: 出組	(記載無し)	出組・台斗無し	—
Z8	明治17.6.上旬	1372	宝珠山大堂地割	8間5尺3寸6分	7間4尺1寸	—	—	—	—	—	ナカシキ
	明治17.11.28		上棟								
	明治18.11.28		遷仏式								
	明治36.11.21		現状	8間5尺3寸6分	7間4尺1寸	一重入母屋	軒唐破風	二手先	出三ツ斗	出組・挿肘木	(窓)

*²³ 1061 は建物の位置・規模に訂正がある一方、1059-1 はその訂正を反映して描かれ、手中景元の押印があることから、前者が下図、後者が清書と判断できる。

の「阿夫利神社御本殿用材寸法仕上明細控」(手中家文書1068)によると、同年9月2日に手中景元が「板絵図之通」に「諸国引札絵図」を作成するよう命じられていることから、手書き図は明治10年9月に作成した「板絵図」を写した縮図、木版図はこれを元に作成した勸進用の引札と判断できる。

次に、明治14年3月16日案(手中家文書1059-2)は縮尺100分の1の平面図で、縁は無く、柱間寸法のみ記載する。「大堂地割正二間数被定候所確写候也」と注記があり、寺側との検討の控えに当たる。平面は以下、明治15年6月11日案(手中家文書2968所収)、明治16年4月案(手中家文書1282)、明治17年6月案(手中家文書1372)が現存するが、明治14年6月1日案では図中に明治15年5月まで複数度の年紀と多数の書き込みがあるなど、これらの図を元に検討が続けられた様子が窺える。

一方、仕様に関する文書は、明治15年4月19日案(手中家文書1210)、明治15年12月案(手中家文書1254)、明治16年1月案(手中家文書1255)、明治17年5月10日案(手中家文書1358)、明治17年5月21日案(手中家文書1362)の5点が現存する(Table 1)。このうち明治17年5月10日案は、手中明王太郎方・矢内右兵衛方・大山職工方の3者の分担を記す点で興味深く、また同文書と明治17年5月21日案の2点は部材ごとに「此用材未ダ荒木ニ候」「此用材木取横摺迄出来」など記しており、細工の進捗を伺うことができる。

以下、これらの史料および手中景元の日記から、平面・意匠の検討過程を考察する。

4.2 明治度本堂の平面の検討過程

まず規模は、明治11年(1878)4月案では桁行12間×梁間10間で、寛永度を上回るが、明治12年9月に「大堂桁行拾間、梁間八間」と変更された*24。

具体的な寸法は明治14年から検討が始められ、同年3月16日案では桁行9間4尺4寸8分×梁間8間1尺4寸8分(58.48尺×49.48尺)だったが、日記*25では明治15年4月19日に「定ル」、同年5月7日に「本堂間数ヲ改直シ」、同年6月11日に「再々度改ル」など数度に涉

って改訂された経緯がみられ、各平面図の梁間・桁行の寸法も図ごとに異なる。最終的には、「大山宝珠山大堂木割、十五年十月卅日正ニ定ル」とあり*26、明治15年10月30日に「木割」すなわち基準となる垂木の一枚寸法と柱間の割付が確定し、以後は明治16年4月案にみる8間5尺3寸6分×7間4尺1寸(53.36尺×44.40尺、約16.2m×13.5m)で一貫した。この寸法は、梁間は寛永度とほぼ同じだが、桁行は20.82尺(約6.3m)小さい。明治度の敷地である八幡平は、斜面を掘削して拡張したものの、寛永度に比べれば非常に狭く、規模の縮小はこのためであろう。

平面は、一貫して寛永度の護摩所・堂番居所・御供所を持つ形式を継承する(Fig.8~10)。建具は、外廻りは唐戸を主としたが、現存建物では最終的に正面中央間を除き格子戸(引戸)が多用された。

特に注目されるのは背面側に火燈窓を設ける点である。最初に確認できるのは明治15年6月11日の平面図で、背面側の柱間に「カトウ」との書き込みがある。同様に、同年12月の仕様書には「火燈窓上下四ヶ所」、明治16年4月の平面図には中央間に張り出した棚と「火燈口」との書き込みがある。これは、寛永度の「三社献供之場所」に該当するとみられ、新始後の明治17年6月案でも「タカニ尺五寸 中シキイ」とあって、形式は不明なもの窓が計画されている。現存本堂は、宝物庫増築により背面側が改造されているが、痕跡から建立当初は窓が設けられていたことが確認できる。

但し、寛永度に本堂背後に位置した境内三社は、神仏分離と寺地移転により明治度には存在しない。しかし、大山山頂の本宮(石尊宮)は阿夫利神社上社と名を変えて存続しており、明治度本堂では神仏分離を経てもなお、山岳神を遥拝する神道的な空間を継承したといえる。

4.3 明治度本堂の意匠

まず屋根は、明治12年(1879)10月の2図は二重屋根で描くが、手書き図では向拝を葺き下しから軒唐破風に朱筆で修正し、木版図は修正後を採用する(Fig.11)。先述の通り、手書き図は明治10年7月に作成された板絵図の写しに当たり、同年の再建着手当初は二重屋根で向拝を葺

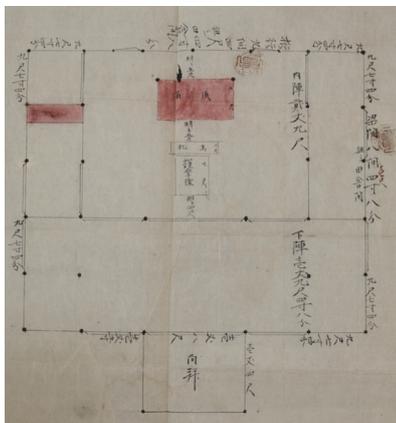


Fig.8 「大山再建地割」
(手中家文書 1059-2)

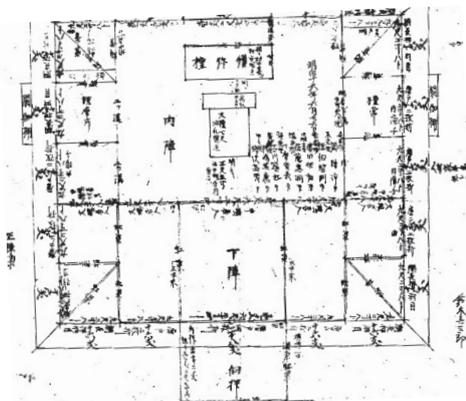


Fig.9 「宝珠山本堂平面図」
(手中家文書 1282)

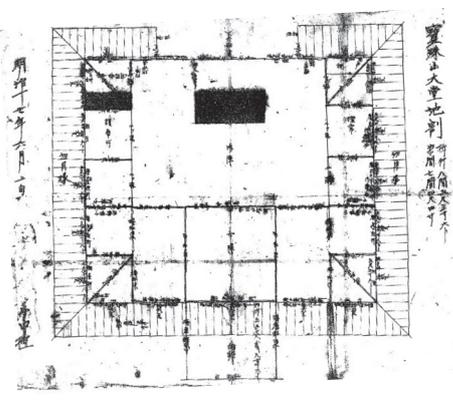


Fig.10 「宝珠山大堂地割」
(手中家文書 1372)

*24 注14に同じ。

*25 注18に同じ。

*26 注14に同じ。

き下しとする計画だったが、明治12年10月時点で軒唐破風に変更したと判断できる。手中景元の「阿夫利神社御本殿用材寸法仕上明細控」（手中家文書1068）によると、同年9月2日に住職が「二重屋根ニハ無之候」と定めており、以後一重で計画された。

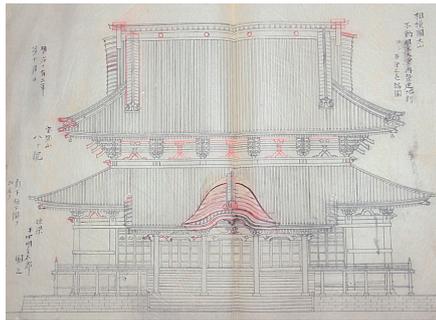


Fig.11 「大山再築地割」（手書き図, 手中家文書 1082）

なお向拝は、明治16年1月の仕様書と同年4月の平面図に「古留唐博風造」と記載されるが、以後の仕様書では向拝の記事が無く、日記でも向拝の用材準備が全く見られないことから、明治16年初頭に計画から除外されたとみられる。明治度の本堂再建では、用材の調達が行き詰り、かつ搬入した椽が紛失するなど混乱があったことが日記から知られ、再建費用の調達も極めて厳しかった^{*27}。この向拝の実現に着手したのは、本堂竣工の13年後の明治31年(1898)2月で、明治33年7月から工事に着手^{*28}、明治36年11月21日ようやく落成した^{*29}。同様に、縁や屋根の銅板葺きも明治16年段階で見送られ、向拝と同時に完成している(Fig.12)。



Fig.12 明治度大山寺本堂（現在）

高さ寸法については、明治15年4月19日案では側柱長さが19.0尺(約5.8m)、内陣柱長さが26.5尺(約8.0m)だったが、同年12月案では側柱は17.4尺(約5.3m)、内陣柱は22.0尺(約6.7m)に変更された。この変更は、先述の平面の変更と連動しており、側柱は寛永度より約2尺縮められた。このため、明治15年7月18日には寺側が手中景元に「堂間ツマリ候得者、柱長サハ如何候哉」と問い、景元が「柱ツマリ候」と返答、「若シ御本尊納兼候テハ不被相成」と再度質問されたのに対し、景元は「御本尊之儀は火縁先キ迄寸法拙宅控有之」として、本尊の寸法を把握しているから問題無いと返答した^{*30}。

*27 明治10年6月「宝珠山本堂入材手控」（手中家文書1313）など。

*28 明治31年「宝珠山向拝其他諸造作控」（手中家文書2022）、明治33年7月「大堂向拝工事ニ付町方大工職工数手間代請求帳」（手中家文書2098）など。

*29 「讀賣新聞」明治36年11月12日広告「大山大堂御落成式公告」。

*30 明治15年5月「相陽大山宝珠山諸録控簿」（手中家文書1218）。

細部は、側廻りの組物は二手先で一貫し、また内陣廻りは明治15年12月と明治16年1月の仕様書で「雨笠様」とある点が注目される。これは「天竺様」の当て字とみられ、明治17年5月の2点の仕様書でも「墓斗ヲ除キ六支肘木並ニ八支肘木ニ至ル迄差堅メ」とあることから、挿肘木で計画したと判断できる。現存本堂でも、内陣廻りに挿肘木が使用されており、寛永度と意匠が共通した。

仕様では、軸部・細部共に塗りを施さず、素木のままとする点が寛永度と大きく異なる。計画段階の仕様書でも塗装に関する記載が全くみられず、当初から素木仕上げで計画されたと考えられる。近世社寺建築については、年代が下るにつれて、大工の技量を誇るため素木仕上げを好む傾向が強まると指摘されている⁹⁾が、大山寺本堂の場合、こうした時代の好みに加え、幕府普請から地元の資金と大工の技術による建設に変わったことも影響したと考えられる。

5. 結論

大山寺本堂は、寛永度には延暦寺根本中堂など同時期の幕府造営と共通する細部や仕様を備える一方、「三社献供之場所」と呼ぶ神道的な空間を内包し、内陣組物に大仏様を採用した点に特徴がある。明治度再建の計画過程では、寛永度の平面・規模や大仏様組物の継承が試みられ、特に「三社献供之場所」は神仏分離後も関わらず、その空間が踏襲された。向拝の軒唐破風や素木造の採用に年代的变化や造営背景を反映するものの、寛永度が強く意識された結果といえる。

なお本稿は、渡部京介「相模国大山寺本堂の復元的研究」（2014年度東海大学建築学科卒業論文）に拠るところが大きい。記して感謝したい。また本稿は、2014年度文部科学省地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)の助成を受けた。

参考文献

- 1) 山岸吉弘：近世相模国大山寺普請の内容的特質と明王太郎の行動及び役割について、日本建築学会計画系論文集 No. 644, pp. 2241-2248 (2009)。
- 2) 大山史, 相模大山縁起及文書, 武相考古会, pp. 40-106 (1931)。
- 3) 手中正: 手中明王太郎と大工文書そして明王太郎敏景, 伊勢道中日記-旅する大工棟梁, 平凡社, pp. 123-190 (1999)。
- 4) 西和夫: 相模国愛甲郡半原村の大工について, 日本建築学会関東支部研究報告, pp. 149-152 (1984)。
- 5) 鈴木光雄: 半原宮大工矢内匠家匠歴譜, 私家版(2009)。
- 6) 福原高峰: 相中留恩記略, 有隣堂, 1967。
- 7) 北野信彦・本多貫之他: 初期の日光社寺建造物に使用された赤色塗装材料に関する調査, 保存科学 No. 49, 国立文化財機構東京文化財研究所, pp. 25-44 (2009)。
- 8) 滋賀県教育委員会: 延暦寺根本中堂及重要文化財根本中堂回廊修理報告書, 滋賀県教育委員会 (1999)。
- 9) 文化庁歴史的建造物調査研究会: 江戸時代の寺院と神社-建物の見方・しらべ方, ぎょうせい(1994)。